

『平家物語』 絵本・絵巻の挿絵について

—— 明星大学図書館所蔵本を中心に ——

附 林原本・明暦版本・真田本・明星本場面对照表

山本陽子*

序 明星大学図書館所蔵『平家物語』絵本について

明星大学図書館には江戸時代の『平家物語』絵本が所蔵されている。完本ではなく『平家物語』十二巻のうち巻一と巻十二・灌頂巻を欠く十帖であるが、専用の蒔絵箱に収められた現存分は極めて保存がよく、脱漏や汚損もない⁽¹⁾。二百図を越える挿絵が含まれていることは、購買時の記録からも知られていたが、冊子体ゆえに各図を見比べることは難しく、綴糸の傷んでいる帖もあるため、非公開の状態が続いてきた。

そこで詞書を含む全画面の撮影とweb上での全写真図版の公開が志された。当初、明星大学日野校貴重書デジタル保存プロジェクトの一部として第四巻まで撮影した時点で中断されていたが、平成十九年度より新たに「物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化」(平成十九年度科学研究費補助金・基盤研究(C)19520114)の一環として、撮影が再開されたものである。現在、『平家物語』絵本を含む明星大学が所蔵する江戸時代前期の奈良絵本・絵巻類の、図版写真

の公開と書誌・釈文・解説、図版解説、武士の絵画表現の考察を併せたデータベースが構築されつつあり、その一部はインターネットでの閲覧が可能となった⁽²⁾。

全図の写真図版が公開された時点で、個々の挿絵のみを取り出し並べて比較すること、また他の『平家物語』絵の図版と比較することが容易になった。そこで作成を試みたのが、文末に『平家物語』絵本・絵巻諸本の場面对照表⁽³⁾として掲載した、他の『平家物語』絵巻・絵本との挿絵場面選択の比較表である。本論ではこの表を併用しつつ、他本の挿絵と明星大学本挿絵とを比較し、個々の特徴を考察したい。

一 『平家物語』の絵画化と作風

『平家物語』の絵画化はいつからか。作中人物が登場する作品であれば鎌倉時代に始まり、平清盛が活躍する「平治物語絵巻」が作られ、現存している。一方では小督と高倉天皇と隆房の恋物語を描いた「隆房卿艶詞絵巻」や、重盛や維盛、重衡ら平家の若者たちの華やかな宮廷での出来事を描いた「平家公達絵巻」のような白描の絵巻も現存している⁽³⁾。軍記絵巻として、集団行動する源平軍や、鎧兜に身を包んだ個々の武者が勇ましく表された⁽⁴⁾前者と、平安王朝の恋物語としての側面である後者とは、顔貌の描き方から場面設定まで、全く異質な絵画表現となっている。

『平家物語』挿絵の確実な文献上の初出は、永享十年(一四三八)『看聞御記』の、後崇光院が内裏より借覧し詞書を源中納言らに読ませた「平家絵十巻」⁽⁶⁾で、引き続き南都喜多院の「平家八嶋絵」三巻や、内裏の『平家物語』四十帖、「平家絵扇流屏風」等、相次いで小画面連作

の『平家物語』絵と申しき記事がある⁽⁷⁾。ただしこれらが如何なる作風であったかは判らない。現存最古の「平家物語絵巻」は十六世紀の土佐光信工房作とされる、静嘉堂文庫美術館・個人・京都国立博物館に部分的に分蔵される白描「平家物語絵巻」である⁽⁸⁾。画面を見る限りでは、武者は軍記絵巻特有の表情とは異なるが、恋物語の絵巻ほど耽美的ではない。注目すべきは『平家物語』から派生した素朴な物語の絵本・絵巻類が作られ始めている⁽⁹⁾ことで、「横笛草子」のような恋愛と発心を主題としたもの、「義経東下り」「じざり弁慶」のような武者を主人公としたものと、分野は双方にわたる。

一方、『平家物語』中の特定の画面を抜き出した屏風絵で、構図の近似し定型化した作例が、桃山時代から江戸時代にかけて多く見られる^(註7参照)。「一の谷合戦図」「宇治川先陣争図」「平敦盛・熊谷直実図」「那須与一」など個々の場面を取り上げたもの、「一の谷・屋島合戦図」のように大画面に多くの名場面をちりばめたものなど武者絵的な合戦屏風の一方、「大原御幸図」のような叙情的な主題と描写のものもある。

近世の絵入り『平家物語』で注目されるのは、大名家旧蔵本が多いことである。福井藩主松平家に伝来した林原美術館本の考察では、『時慶卿記』寛永九年条の「平家物語絵詞」が東福門院和子の出産の翌日から読み聞かせられた記事から、「かような事情を背景として、江戸初期から中期にかけて、将軍家や大大名が、浩瀚な『平家物語』の絵巻づくりを企画したとしても不思議ではない」とされる^(註6参照)。また真田宝物館本は真田家の、熊本大学北岡文庫本も細川家の所蔵であったとい^(註5出口解説参照)、大名家の嫁入り道具として製作された可能性が示唆されていることは、明星本の成立を考える上で興味深い。

二 『平家物語』絵本・絵巻諸本の場面对照表』について

『平家物語』絵本・絵巻諸本の場面对照表』には、明星本と比較的時代が近いと思われる江戸時代前期の『平家物語』絵巻・絵本のうち、完本で全図版が公開されている作例として、林原美術館本と真田宝物館本を選んだ。林原美術館本の図版と場面解釈には、小松茂美編の中央公論社版を、真田宝物館本では、郷土研究誌『長野』に連載された小林一郎・小林玲子「絵で読む『平家物語』」の図版写真と解説を参考とした。これらと同じか先立つ時代の版本として、上方で刊行された明暦二年(一六五六)版の挿絵を加えた。『平家物語』最初の絵入り版本であり、出口久徳によって以後の絵入り版本に影響を与えたこと、チェスタービーター図書館本や真田宝物館本などの挿絵入り写本への影響が指摘されるものである。明暦二年版本の図版は福井市立図書館松平文庫本を用い、書誌以下は出口の「明暦二年版『平家物語』の挿絵をめぐって」^(註13)「絵入り版本『平家物語』考―挿絵の中の義経・弁慶の物語について―」^(註14)を参考とした。

各本の場面選択以外で注目したのは、一画面中に「異時同図」のような複数の時制、あるいは霞や山で区切られた複数の時間や場所が描かれているか否かであり、複数の場合はその総場面数を洋数字で付加した。また、明星本の絵は総て見開きの二頁に亙るが、真田本は見開きと半分(片頁)のものとがあり、明暦二年本は、中央で折られた一丁分の表裏が一続きの絵のものと、別場面の二図(片頁ずつ二図)のものがあるので、片頁のものに*印を付けた。

さらに錯簡の有無も記した。林原本巻十二に錯簡があることは、すで

に小松が指摘している(註6参照)。今回用いた明暦二年版本の松平文庫本にも巻一・三・七・十・十一・十二に、錯簡と思しきものがあり、該当箇所を捜すこととなった。巻十一の「遠矢」の船戦の箇所で陸上で弓を射合う両群は、錯簡か絵師の間違いか不明だが、これ以外の該当箇所はカッコ内に正当と思われる章名と丸囲いの洋数字で示した。

この【表】でまず目に付くのは、林原本の七〇五画面、他本の約三倍という、画面数の圧倒的な多さである。平家物語十二巻の各巻をさらに三巻ずつに分けた構成であるためか、場面選択の偏りはほとんどない。さらにその約半数が一画面に複数の場面を霞等で区切って描くので、総画面数は膨大となる。

しかしその林原本でも、総ての場面を網羅してはいない。例えば巻六「紅葉」で、高倉天皇の愛した紅葉の葉を焚火にして酒を飲んでしまう下部たちの場面は、図柄も美しいので明星本や明暦二年本で取り上げられているが、林原本にはない。他の三本の画面数は、明暦本の一八四丁から真田本の二五三面まで比較的近いが、敦盛最期や那須与一のような名場面以外では選択場面に相違があり、明暦本と図様の近似が指摘される真田本(註13参照)ですら、例えば巻一の挿絵のうち同一内容が選択された例は約半数にすぎない。

さらに、真田本にある巻一「清水炎上」の高倉天皇の即位式や、明星本巻九「一二之懸」の一番乗りを名乗り挙げる熊谷父子、明暦本巻十「滝口入道」に帰依する人々など、それぞれに他の三本にない場面がある。選ばれた箇所が完全には一致しないことから、これら各本の場面選択が、相互間の全面的な模倣や引用ではないことがわかる。

二 林原美術館本の特徴

そこで各本の挿絵を比較しつつ、その特徴を見てゆきたい。林原美術館本は、越前福井藩主松平家に伝来した(註6参照)。初巻の詞書の筆者青蓮院門跡が承応二年(一六五三)没の尊純法親王にあたるので、制作時期の下限はこの頃とされる。折紙の筆者目録に「絵 土佐助」とあるが、該当する絵師は土佐派には見出されず、「土佐派の典型的な画風ではなく、民間の工房にあった人と考えられる」という。

公家や女性の引目鉤鼻と武者の顔立ちとを描き分け、公家や女性の顔は顎が長く面長である。武者(図1)は目鼻立ちが大きく、目は上下の顎の線を描いて白目を表し、鼻は尖り気味で小鼻や鼻孔を描き、口は唇が厚いか、への字に結び、頬骨を強調したごつごつとした輪郭で、概ね面長に描かれ、鼻の輪郭が明確な真横向きの顔が多い。このような特徴は『平治物語絵巻』以来、『蒙古襲来絵詞』や『後三年合戦絵詞』など男絵系の合戦絵巻中に武者の顔貌として見られるもので、林原本もこの武者表現を受け継いだと思われる(註4参照)。



1 林原美術館本巻四「橋合戦」の武者の顔貌

面長で時に頬骨の強調された「豊頬長顎」とも見得る顔立ちと、手首足首のくびれた四肢、女性の長くうねる髪と後れ毛をやや執拗に描くこと、巻九「落足」第二段の「人馬の肉、山の如し」の散らばる人馬の屍骸を忠実に、斬られた首の断面まで

も表すような残酷な描写は、土佐派よりもかつてこの越前松平家の下で絵巻を制作した岩佐又兵衛派の影響を思わせる。

王朝風の直衣や女房装束、鎧兜や馬の描き方は手馴れている。一方で小紋の直垂や、水墨画の襖と青畳が敷き詰められた数奇屋風書院造の建築など、当世風の要素も混在することは、同時代の物語絵巻と共通する。絵具は上質で、特に巻一「我身栄華」の衣装などは絵具も濃く丁寧で、衣の輪郭や文様には金泥の細線が用いられる。霞は白群に金砂子が蒔かれ、背景は緑青の濃淡が使い分けられ、松枝も細やかに表現される。画面には長短があり、巻一「我身栄華」のような数紙に及ぶ長大画面の一方で、半紙にも満たない場面もある。短い場面が続く絵にあわせて、一紙ずつに数行のみ書かれた詞書が存在することから、まず絵が先に描かれたと想像される。巻十二の数箇所の絵の錯簡は、絵と詞書を表具する時に起こったと考えられている。

また一場面に描かれる人物の多さも目立つ。例えば巻十一「弓流」の同場面では、明星本の十五名、明暦本と貞田本の各二四名に対し、林原本では六一名を数える。人物の大きさはいづれの本も六センチ前後とさほど変わらないが、林原本ではびっしり重なるように描かれる。

画面構成で特徴的なのは、一つの画面に数場面を描く例が多いことで、約半分の画面が該当する。ことに巻四では三五図と、巻全体の三分の二の画面において、霞や山並で区切って複数の異なる場面を描き込む。例えば巻三「有王島下」二段は、鬼界島に着いてから俊寛を捜して昼夜となく歩き、再会するまでの有王が、一面面を霞と山で区切った五箇所に描かれる。巻四「厳島御幸」五段の高倉上皇も、鳥羽殿への到着・後白河との出会い、語り合い・厳島への牛車・船と、一面面に五箇所、霞・樹木・館・土坡を駆使して細かく区切られた空間に表される。あまりに

細切れの慌しい画面は、再会のしみじみとした情感を感じさせる余裕を与えない。

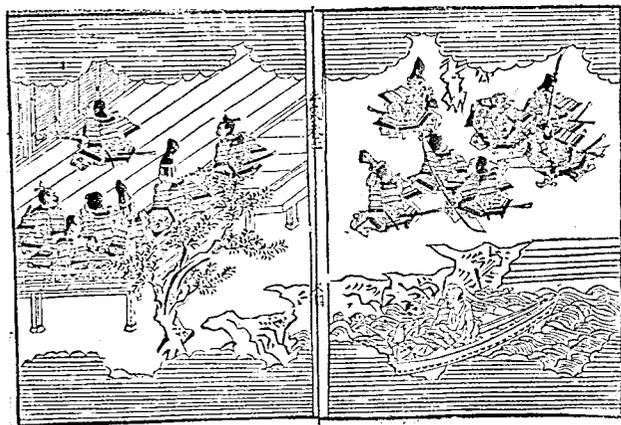
総じて、各画面ごとに完結した絵画または緩急自在な絵巻というよりも、『平家物語』の詞書の内容を逐語訳的に忠実に絵画化した印象が強い。

三 明暦二年版本について

明暦二年版本については、出口久徳の論文(註13・14参照)に詳しい。この版は、『平家物語』の最初の絵入り版本で、他の版に比べ挿絵数が特に多く、また寛文十二年版や写本のチヌスターピーター図書館本など、後代の『平家物語』挿絵本への影響が指摘されている。

挿絵の特徴として出口が挙げるのが、群像表現を用いた絵と、一丁分の表裏で続く図様が多いことである。巻七「木會願書」では、明暦本の表裏にまたがる一丁の図を開くと、義仲と願書を書く覚明の他にこれを囲んで見つめる総計二十三名の従者たちが描かれ、同場面を描いた版本『舞の本』の挿絵の二名、寛文十二年版『平家物語』の三名と比べ、際立って多い。ところが実際に本として綴じられた状態では、明暦本の図は中央から折られ、表裏に分かれてしまうので、裏側の頁では従者達の視線は義仲に届かず、群像表現の効果は発揮されていない。そこで出口はこの図様を、典拠とした先行作品に基づいたゆえと考ええる。

巻三「有王島下」の俊寛との再会の場面では、丁の表に立ちすくむ王と俊寛を、裏に有王の前に倒れる俊寛を描き、丁をめくると次の動きが見える表現を挙げ、先行作品の異時同図法を踏襲したことによった効果と解釈する。また巻五「奈良炎上」で平家軍と僧兵達の乱戦の図中に、



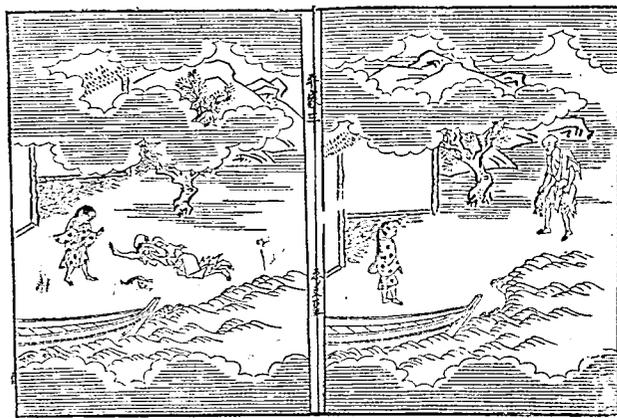
2 明暦版本巻七「竹生嶋詣」の丁の表と裏

明暦本が先行作品に拠ることは、構図の巻九「木會最期」のように、兼平の最期が前頁、義仲の死が後頁と、時制と逆になった見開きの図版に基づいたと思しき図からも裏付けられる。その典拠となった作品がどのような形態であったかを、先の【場面对照表】でさらに考察したい。

明暦本の挿絵の構図は、全体が同質というわけではない。巻一・巻二のほぼ総てが「木會願書」のような丁の表裏に互る図様である

東大寺炎上の張本人とされる重衡と判別できる姿がないことを挙げ、「先行する合戦絵のある部分を切り取ってきたという印象を受ける」という。

明暦本の先行作品として、出口は「群像表現、異時同図法、中世合戦絵的な絵など」の要素から版本ではないとし、伝土佐光信筆の白描絵巻のような絵巻形態のものを想定する。その一方、一の谷合戦屏風と明暦本巻九「坂落」がともに、坂を下ろうとする義経勢と同時に、奇襲に気が付いていない平家の陣内を描くことを指摘し、「絵の発想、人物の配置、描き方などが極めて似通っている」という。



3 明暦版本巻三「有王島下」の丁の表と裏

この絵師自身の工夫かと思われるものに陣幕の紋がある。源平の紅白の旗は、着色画ならば一目で区別が付くが、単色の版本では識別できない。そこで平家の陣幕には蝶紋、源氏には笹（笹竜胆か）が描かれる。これは明暦本巻五「富士川」以降に見られ、巻四「橋合戦」にはない。単色の版本や白描絵巻に拠ったのであれば、最初から識別のための紋所を写したであろう。彩色本を典拠としていたこの絵師が、単色の版

のに対し、巻三以降巻六までは、「建礼門院の安産祈願」と「赦免状を下す清盛」のごとく、多くが丁の表裏で場所や時制が異なり【表】では*印）図様は繋がらない。絵師が違うのか、丁の中央で図様が切れることに気付いたのか、巻七「竹生嶋詣」(図2)の如く当初は一続きであった図柄も、半分は船着場に、半分は竹生嶋社の縁先にと別画面になるように手を加えている。典拠本の「異時同図法」のなせる業と見られた巻三「有王島下」の俊寛との再会場面(図3)は、二図とも同じ家と木の背景なので、版本の絵師が意図的に、丁の表裏で俊寛の時制を変えて二図にしたものと思われる。

本での源平の識別し難さに気付き、巻五から付加したものではないだろうか。

一方、「坂落」の一の谷合戦の構図からは、典拠となった絵の形態が想像される。坂上の源氏と坂下の平家の陣屋の様子を同時に描く構図は、上下の空間が必要とされる。縦幅の狭い横長の絵巻では、下方の平家陣まで描き込むのは難しく、林原本のように改めて別場面として描く他はない。しかし屏風のような大画面であれば源平を上下に描くことは容易で、効果的ですらある。明暦本が典拠とした先行作品は、必ずしも白描絵巻のみとは限らない。絵巻にしては群像場面の人数が多く、華やかであることも含めて、屏風絵に拠った箇所も少なくないと思われる。

四 真田宝物館本について

真田宝物館本は、挿図二五三枚（註11参照）を貼り込んだ三十巻本で、真田家に伝来し加賀大聖寺藩出身の五代藩主真田信安夫人の嫁入り本かとされる²²。挿絵は見開きと半丁とが混在する。水波や豊、着衣などの彩色は濃く、比較的原色を多く使う。霞には金砂子を蒔き、衣文線や女房装束の文様、鎧兜の金具には金泥が使われている。貴族の顔は白塗りで面長の引目鉤鼻、武者は白塗りと肌色を使い分け、鼻がやや大きく描かれるが両者の差は極端ではない。弁慶²³の顔のみは、灰色で一回り大きく描かれるのが目立つ。真横顔が比較的多く、奈良絵本にしばしば見られる頬のふくらみを表す線が入る。

真田本挿絵には明暦本と近似する図様の画面の多いことが、巻一「妓王」の、三人の庵を訪ねる出家姿の仏御前の図版を通して、出口により指摘されている²⁴。しかし両者の場面選択は必ずしも一致するわけではない。

い。例えば巻六「紅葉」から「小督」に互る高倉天皇の物語は、明暦本では六場面、真田本で五場面にわたって描かれる見所であるが、同一の時点が選ばれたのは天皇の文を見る葵前と、小督を探し当てる仲国の二箇所のみに過ぎない。

さらに、四本の中でも真田本以外に見られない図様もある。例えば巻九「浜戦」の知盛が乗って来た黒馬を帰す場面で、他の三本が海中で知盛を振り返る馬を描くのに対し、真田本のみは陸に上がってから沖の知盛に向かって嘶く馬の姿を描く。明暦本と真田本の選択場面や図様は、似たものが多いとはいえず、完全に重なるわけでも一致するわけでもない。両者は直接的な影響関係にあるというよりも、合戦絵巻や合戦屏風を通じて培われ定型化されつつあった平家物語の数多くの図様の内から、それぞれが引用したゆえの近似ではないだろうか。

また真田本には、八巻「猫間」の段の挿絵が全くない。他本ではいざずれも猫間中納言に田舎風の食事を出して辟易させる木會義仲と、牛車の乗り方を知らずに暴走させてしまう義仲の挿絵がある。これらは木會義仲の都での田舎者ぶりを描いた段であり、都の者には面白くとも、木會と地理的に近い真田家にとっては不快な内容であろう。同じく「鼓判官」で、身の程知らずの義仲が公卿の知康を怒らしてしまう箇所の挿絵がないことも含め、真田本の地方性を思わせる箇所である。

五 明星大学図書館本の特徴

明星大学本の挿絵は二二三面、すべて見開きの形で冊子体の本文に貼り込まれ、錯簡はない。絵具は上質で、褪色は見られない。桃色や水色などの中間色を交え、水波や土坡の絵具をばかす。戦闘場面でも人数は

比較的少なく、背景はあっさりと余白を多く取って描くので、全体的には淡白な印象である。しかし法皇や宮中の女房達の着衣には細い金泥の線や衣文線や文様が描かれ、武者の鎧兜の金具にも金泥が用いられる。刀や薙刀などの刃物に銀は使われず、灰青の絵具に青が塗り重ねられる。黒い直衣に織り出された立涌などの有職文様や烏帽子、鎧の黒金具には、膠分の濃い艶のある墨が上から塗られ、襖絵や出産の白絵屏風には光沢を持つ雲母が刷かれるなど、光線の加減でしか見えない箇所まで筆が重ねられている。

絵の上下には総て、柔らかな輪郭線の霞が棚引く。霞は淡灰色の上に金砂子が極めて濃く時かれる。地面にも部分的に金泥が刷かれ、余白の多い空間の調子が整えられている。詞書の料紙にも、下絵として金泥で霞の間に小さ目の草花や水草、風景等が繊細に描かれ、各冊の表紙見返しには一面に金箔が貼られている。上質の素材と金の多用、細やかで手の込んだ仕事、ほとんど開かれたことのないような保存の良さ、傷みのない専用の蒔絵箱などからは、林原本や真田本と同様に、大名家の嫁入り道具のような制作事情が想像される。

描写はきわめて丁寧で、直衣や女房装束、鎧兜、特に馬の形状は手馴れている。敦盛の萌黄や直実の赤皮絨など、鎧の配色も本文にかなり忠実である。義経の「赤地錦の直垂に紫裾濃の鎧」を再現するため直垂にはそれらしき模様を加え、鎧には色の出にくい紫をあえて用い、弁慶の直垂には仏教色の強い輪宝模様を描く。南都牒状などの僧侶たちには、墨染よりも濃淡の柿色に金泥で模様を入れた衣の者を多く描くので、寺中であっても華やかな色彩となる。

卷三「御産巻」の中宮の産室（図4）では、本文に記述がない白絵の屏風や侍女たちまでも白一色で描えた装束などを、有職故実に従って

白・銀・雲母を駆使して描く。建築物は丁寧な屋台引きの細線で描かれ、板や柱ごとにぼかしが入れられて立体感が出される。もっとも襖絵には水墨画が描かれ、床には畳が敷き詰められた当世風の数奇屋風書院造に描かれるところは、林原本や真田本と同様である。風景は大和絵の穏やかな土坡と松が多用され、俱利伽羅谷や一の谷のような山崖は迫力が無い。敵島神社や富士山は比較的现实に近いものの、高野山や那智滝などは全くかけ離れて類型的に描かれる。

男女の貴族の顔貌は、白塗りのやや長めの顔に、点状の瞳に極細の上瞼の線を添えた目に鉤鼻と、赤い小さな点の口を描き、頬には淡朱をぼかす。武者は白塗りと肌色の者が混在し、瞳を挟んで上下の瞼の線を細く入れる。鼻はし字状の鉤



4 明星本卷三「御産巻」の中宮の産室

鼻、口は赤い小点で、小さな口髭か薄墨で口の回りをぼかす場合もあるが、貴族の顔立ちと大差ない。真田本では顔色を灰色にするなど他本では際立って恐ろしいに表される弁慶ですら明るい肌色でおちよぼ口の童顔（図5）である。兜の中の顔も丸い輪郭線で括られ、真横顔はきわめて少ない。²⁶林原本など合戦絵巻の武者の顔に見られるような、兜の目庇ぎりぎりに見開いた



5 明星本巻十一「壇浦合戦」の弁慶の顔貌

目と大振りな鼻と厚い唇や、への字口、頬骨の出たごつごつした輪郭線の武者らしい顔貌表現（註4参照）は行われない。水夫達など庶民も、体は手首足首が多少くびれた筋肉質であるが、顔立ちはずしくなく、さほど貴人との差は見られない。

複数の時点を一図に描くことは珍しく、一画面に同一人物を複数回描く例は巻二「少将乞請」の、教盛邸で使者を命じられる季貞と清盛邸で口上を言う季貞の一箇所のみである。また一人の人物の周囲に異なる時制の出来事を描く例は、巻四「鶴」で怪しい黒雲が御殿の上に棚引いた時点と、頭は猿、胴は狸、尾は蛇で鳴声が鶴に似た怪物が仕留められる二時点と、巻五「文覚被流」で文覚を中心に、まず資行が烏帽子を打落とされた事、刀を抜いた文覚に武者所の右宗が対向する所、その後ようやく寄って来た人々の三時点を描く、二箇所である。

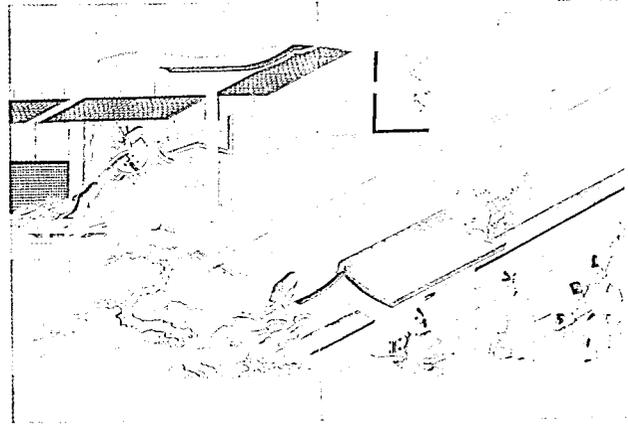
場面選択では、一の谷と屋島の合戦を含む巻九が三九図と他の約二倍あり、「一二之懸」が多く描かれている以外は、ほぼ均等である。「足

摺」の俊寛が、尻餅をつく他本と違ってうつ伏せに描かれるのは、本文の「渚にあまりたをれふし」の忠実な絵画化であろう。しかし他の名場面、「橋合戦」の淨妙坊や「坂落」の「敦盛最期」、「那須与一」等は、屏風絵や他本の構図と近似した定型化された図様である。また異国の絵が少ないことも指摘できる。『平家物語』に含まれる挿話のうち「頼家」「名虎」など日本の場面はあるが、他本に見える「蘇武」など中国の故事、「慈心房」の閻魔王宮の挿絵はない。ただし唯一描かれる「咸陽宮」の秦始皇帝宮の異国表現は、服装、建築、文様、庭の岩組に至るまで手馴れたもので、同時代の他の作例に劣らないだけに、なぜ描かなかったか理解に苦しむ。

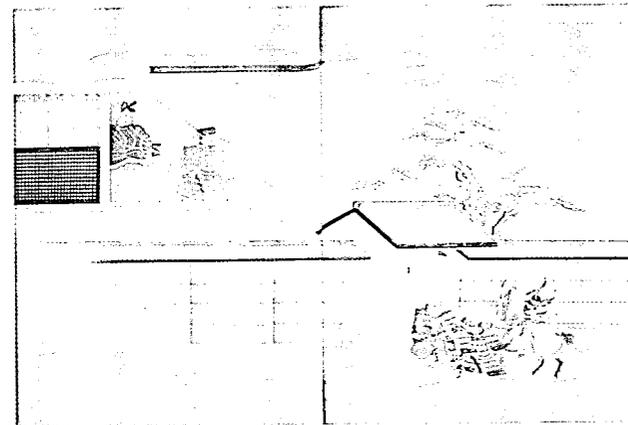
【場面比較表】で特記すべきは、明星本で死や残酷な場面が回避されていることである。例えば巻九「小宰相」では他三本が入水した小宰相の死体を描くのに対し、明星本は入水直前の合掌する姿しかない。『平家物語』の頂点とも言うべき巻十一「先帝御入水」の、二位の尼が安徳天皇と入水しようとする場面も他の三本にあるが明星本にはなく、入水しても引上げられて生き残る建礼門院と泳ぐ宗盛父子の場面のみを描く。その宗盛父子の斬首の場面も巻十一「大臣殿誅罰」の他の三本には見えないが、明星本にはない。もっとも黒髪に染めた実盛の首や、斬首の場で乳母と引き離される副将など、全く描かれないわけではない。それでも極力、血や討たれた死体よりは生前の場面が選ばれ、林原本のように切り離された首やその断面、流れ出た血までを執拗に描くことはしない。このような残酷場面を回避する傾向や、弁慶のような荒武者すら顔貌を恐ろしげに描かない明星本ゆえ、合戦場面は林原本等他の挿絵に比べて迫力を欠く。すまし顔で刀を振り上げたのみで斬られもせず血の流れない画面（図6）は、人形の戦争のようには見えぬ。軍記としての



6 明星本巻四「橋合戦」の浄妙坊と一来法師



7 明星本巻五「月見」旧都の大宮御所を訪れる徳大寺実定



8 明星本巻七「忠度都落」俊成に和歌を差し出す忠度

『平家物語』の挿絵としては、他本に劣る重大な欠陥と言わざるを得ない。

しかし『平家物語』はまた、平氏という貴族の物語でもあり、古くは「平家公達絵巻」や、後には「横笛草子」・「妓王」のような御伽草子絵を派生し、「大原御幸」屏風のような、恋や発心にまつわる絵画の主題ともされてきた。明星本の挿絵は、この優雅な『平家物語』の系統に位置づけ得る。軍記物語としては冗漫な箇所となりがちな巻五「月見」の徳大寺実定が旧都の大宮御所を訪れる場面(図7)や、巻六「小督」の段など王朝風の場面は極めて収まりがよい。さらに雅な心を持ちつつも

戦場に赴かねばならない鎧姿の平家の公達、例えば巻七「竹生鳥詣」の弁財天の社前で琵琶を弾く経正や、「忠度都落」の俊成に和歌を差し出す忠度(図8)などには、華麗な甲冑の描写も巧みなこの絵師ならではの情緒が漂う。

結 『平家物語』挿絵の源泉

本論では江戸時代の『平家物語』挿絵を、林原本・明暦版本・真田本・明星本の比較をしつつ考察した。その結果として諸本の間にある絵

画表現の差異―軍記絵巻としての傾向が強い林原本、合戦屏風からの引用も含む明暦本、明暦本と近似する図様も含むが必ずしも一致はしない真田本、合戦絵というよりも宮廷文化的な表現傾向を持つ明星本―を見た。これらの相違は何に基づくのか、軍記物語性と王朝的な耽美性のよ
うな、『平家物語』自体の持つ複数の側面に由来することは先に論じた。

しかし『平家物語』以外にも、そこから派生した様々な物語や絵画の影響がある。出口は明暦本の義経主従の扱いについて、『平家物語』本文に書かれる以上に義経の登場場面が多く、『平家物語』では七箇所に名が載る程度に過ぎない弁慶が、三草勢揃以降は必ず義経の側に描かれることを指摘する(註14参照)。実際、明暦本には弁慶の登場する図が十六箇所あり、同様のことが他の三本にも云える。巻九「三草勢揃」から巻十二「判官都落」まで、林原本では二八箇所、真田本では判別できるもののみで十三箇所、明星本では巻十一までで十二箇所と、ほぼ総ての場面で義経の側に七つ道具を背負った弁慶が描かれている。版本か写本かを問わず、近世の『平家物語』挿絵全体に共通する特徴であろう。

その七つ道具が義経主従の典故を推測させる。弁慶は場面によって袈裟頭巾・鉢巻・揉烏帽子・兜と様々な姿であるが、七つ道具は他の僧兵から弁慶を際立たせる目印として、どの本の挿絵にも描かれる。しかし『平家物語』自体には七つ道具の記述はない。『平家物語』から派生した、義経や弁慶を主人公とする様々な幸若舞曲や御伽草子等によって、絵師と観者が共有する常識となっていたゆえに、七つ道具が挿絵に描かれたのである。

また諸版本について出口は、巻十一前半部で平家に比べ義経軍の場面が多く絵画化されていると指摘する(註14参照)。語呂合わせに過ぎない「勝浦合戦」や使者を縛る「大坂越」のような、挿絵にするほど価値

のない源氏の場面がある反面、この間の平家はほとんど描かれないう。写本挿絵も対照表で見ると同様に「勝浦合戦」や「大坂越」を含み、平家側はない。しかしこれは単なる源氏好み、判官忠貞のためとは限らなからう。例えば一の谷と屋島を対とする合戦屏風では、一の谷屏風の鴨越の山々に対応するように屋島屏風にも山岳が描かれ、その点景として大坂越えする義経一行の姿が必要とされる場合がある。些少な挿話の場面は、このような屏風の一部を用いたことに因るのではないか。

逆に、平家側ばかりが選択された箇所もある。例えば巻七「忠度都落」「経正都落」、巻十の「千手」「横笛」等は、『平家物語』の大筋に無関係な出来事であるが、どの本の挿絵にも、これらの場面が選択されている。忠度と経正、千手が選ばれたのは、謡曲の「忠度」や「経正」「千手」などに、横笛は「滝口入道縁起」や「横笛草子」などの御伽草子によって親しまれていたためであろうことは、義経主従の場面が多いことと同様に考えられる。

これら『平家物語』諸本挿絵の場面選択や、個々の場面の構図の多様さは、中世の数々の『平家物語』絵巻や合戦屏風、絵本類を受け継いだのみならず、この物語から派生した幸若舞曲・謡曲・御伽草子などの文学や演劇作品が反映された結果である。その背後に広がる中世文化の多彩さには、圧倒されるばかりである。

本論は、平成十九・二〇年度科学研究費補助金・基盤研究(〇)19920114「物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化」(代表研究者)および明星大学平成二十年度特別研究費(共同研究助成費)「明星大学蔵絵入り和本の基礎的研究」(研究分担者)の成果の一部である。

註

- (1) 書誌については、柴田雅生「明星大学所蔵絵本・絵巻―解題とその言語的特徴―」(仮題)『物語絵画における武士―表現の比較研究と作例のデータベース化』(平成十九年・二十年度科学研究費報告書)平成二十一年掲載予定・本データベース 柴田雅生分担「明星大学所蔵『平家物語』絵本について」、参照
- (2) <http://hon.eimkri.netsai.ac.jp/> 参照
- (3) 武田恒夫・尾崎元春・前田誠子「源平の美術(絵画)」『別冊太陽』十三「平家物語絵巻」昭和五〇年
- (4) 山本陽子「小画面説話画における武者の顔貌表現について」『明星大学研究紀要』[造形芸術学部・造形芸術学科]第十七号 平成二十一年(掲載予定)
- (5) 鎌倉末ごろの『入木口伝抄』には、比叡山で制作された「平家物語絵巻」が存在していたと解しうる記事があるという。(出口良徳「平家物語絵巻をめぐる」『平家物語を知る事典』東京堂出版 平成十七年)
- (6) 小松茂美「林原美術館本『平家物語絵巻』のすべて」『平家物語絵巻』巻第十二 二〇六―二四三頁 中央公論社 平成四年
- (7) 相澤正彦「平家物語と絵画」『平家物語の世界展』図録 平成五年
- (8) 玉蟲敏子「作品解説三八」『室町の絵画展―詩画軸・屏風・障壁画―』静嘉堂文庫美術館 平成八年
- (9) 酒巻智子「源平の美学―『平家物語』の時代」『源平の美学―『平家物語』の時代』一〇―一二頁 サントリー美術館 平成十四年
- (10) 小松茂美編『平家物語絵巻』巻第一―十二 中央公論社 平成二年―四年
- (11) 小林一郎・小林玲子「絵で読む『平家物語』」一―二七 『長野』一九三―二〇〇号 平成九年―平成十三年
- (12) 国文学研究資料館のマイクロ資料による
- (13) 出口久徳「明暦二年版『平家物語』の挿絵をめぐる」『立教大学日本文学』八一号 十四―二八頁 平成十年
- (14) 出口久徳「絵入り版本『平家物語』考―挿絵の中の義経・弁慶の物語について―」『学芸国語国文学』二九号 一―十六頁 平成九年
- (15) 一丁に二図あるものも含むので場面数は倍近くなる。
- (16) 明星本の挿絵画面は現状で二三面であるが、巻一と巻十二を欠くため、絵場面数は不明である。
- (17) 「作品解説解説三」『平家物語と絵画―『平家物語の世界展』図録 平成五年
- (18) 赤澤真理「江戸前期における寝殿造りへの憧憬と理解―住吉派物語絵にみる住宅観

―『講座源氏物語研究』第十巻「源氏物語と美術の世界」二三四―二六五頁 平成二〇年

- (19) 市古夏生は丁付や柱刻から、本文のみで版行された本に、後からこれらの挿絵が読えられ、補入されたと推理する(市古夏生「絵入り本の流行」『近世初期文学と出版文化』若草書房、平成一〇年)。本書の錯簡の多さは、この事情に因るものであろう。
- (20) 巻七「北国下向」の琵琶を弾く経正なども、竹生鳥社殿の縁側を切って、表裏で境内と外の風景に分けている。
- (21) 巻七「木曾願文」の従者は画面の小さい絵巻や絵本では、林原本で十三名、明星本四名、真田本九名と、明暦本の二十三名ほど多くは描かれていない。
- (22) 『長野』第一八七号 平成八年 口絵解説
- (23) 巻九「弓流」の二四名中、後ろ向きは四名、斜め前向きが十二名、真横向きは八名である。
- (24) 出口久徳「軍記物語の挿絵と読み―『平家物語』の絵入り版本を中心に―」『軍記と語り物』第三九号 平成十五年・出口久徳「絵画化された『平家物語』真田宝物館『平家物語』解説」『図説 平家物語』河出書房新社 平成十六年
- (25) 例えば京都市立芸術大学芸術資料館には土佐派に伝来した、各本とも全く異なる平家物語絵巻の部分的な粉本がある(京都市立芸術大学芸術資料館編『土佐派絵画資料目録』(六) 平成八年)。
- (26) 例えば林原本「弓流」では全六一名中、いわゆる七・三の角度の斜前向きが二名、後向きが十四名、真横向きが二六名と、真横向きは斜向きと同数かそれ以上に多いのに対し、明星本「弓流」では全十五名中、斜前向きが十一名、後向きが三名で、真横向きは一名と少ない(註4参照)。
- (27) 藤原成一「影薄い弁慶―『平家物語』の世界―」『弁慶』九―十五頁 法蔵館 平成十四年、参照
- (28) 七つ道具は室町末期には絵画にも描かれ「比較的はやくからの常套手段であった」という。(徳田和夫「弁慶」項目解説『歴史学辞典 三 かたちとしるし』弘文堂 平成七年)

内容末尾の洋数字は一段中にある異時間図の場面数 *は片頁のみ ○囲いの数字は錯簡の本来の章の林原本での段数

巻一 壹段	林原要術館蔵 絵巻	明和二年 版本	真田室物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本(統一なし)
祇園精舎				
殿上間討	前会に参内した忠盛と庭の家貞4 鳥羽上皇に頼明する忠盛 2	前会に参内した忠盛と庭の家貞	前会に参内した忠盛と庭の家貞 鳥羽上皇に頼明する忠盛 *	
註	仙洞御所で秋を詠む忠盛 扇を見つけられて秋を詠む女房 熊野詣の船で舟の音兆を得る清盛 出家する清盛			
秀盛	市中を息回る六波羅の秀盛 清盛殿のにぎわい(表大画面)	清盛殿のにぎわい	清盛殿のにぎわい	
我身榮華 妓王	妓王前で舞を舞う清盛 2 清盛に頼明する妓王 2 仏御前の舞を見る清盛と妓王 2 妓王に問を出す清盛 2 清盛邸を出る妓王 2 悲嘆に沈む妓王一家 人々から文を受ける妓王 2 清盛から呼出を受ける妓王 3 仏御前の前で舞う妓王 2 泣き沈む妓王一家 娘の座の尼家の妓王一家 妓王の座を妨げる尼家の仏御前 ともに念仏する妓王一家と仏御前			
二代后	二条天皇の胎室を受取る大宮 入内の旨を下す二条天皇 2 大宮を説得する父の右大臣 2 泣く車に乗る大宮 祈禱殿の二条天皇と大宮	若者一行と牛車(殿下集合②か)		
頼打控	二条天皇の舞殿と頼明の寓中 2 願所で延暦寺の願を遂す奥福寺僧 比叡山を駆け下る延暦寺の僧兵達 坊を聞いて内裏に集まる平家勢 清盛邸へ舞踏する後白河法皇 3 延暦寺僧に焼封される清水寺2 後白河上皇の遠御 2 上皇に本音を語らす西光	三人の尼と一人の尼(妓王①か) 願所で延暦寺の願を遂す奥福寺僧		
清水炎上				
殿下集合	新帝喬叡天皇の御所 御所に集まる清盛 清盛主従を隠しめる基房の下部 資盛の訴えに怒る清盛 2 基房一行を辱める資盛の下部たち 母音を嘆く基房 清盛を叱責する重盛			
鹿谷	高倉天皇の御所行幸 2 山姥の宴事を報告する成親 3 成親が上賀茂社の夢を受ける2 上賀茂社の神木への奉告 鹿谷の宴会で孩子を倒す成親 2 多田行綱を呼び寄せた成親 加賀国目代と清泉寺僧侶との乱闘 清泉寺を焼く軍人たち 目代の館を攻める白山の神人衆徒 白山の神人達が比叡山に訴える 朝廷に訴える比叡山の大家たち 比叡山勢に矢を射かける頼朝勢 比叡山の僧たちを追い返す武士達 関白を説く比叡山の僧侶達 関白師突き立つ様			
頼川合戦				
頼立				
御奥撰				
内裏炎上				
註				
巻二 壹段	林原要術館蔵 絵巻	明和二年 版本	真田室物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
源主流	明家の罪を誅す公卿達2 明家と滯り立ての武士達 西光父子を保護する大泉 流される途中の明家 2 比叡山の衆徒が管轄 2 明家墓道に向う大泉 比叡山に集った明家3 九曜の形を見る一行回廊型 法皇に奏上する西光 清盛に密告する行綱2 資成の復命を聞く清盛 清盛邸で捕まる成親2 西光が清盛に言い返す4 引き控えられる成親 2 成親の命乞をする重盛 4 嘆く成親の家族 2 法皇に別れを告げる成親 3 教盛と対面する成親 2 教盛から清盛への使者となる季貞2 教盛の屋敷に戻る成親2 法皇に抗し武裝する清盛 前庭に寝られる清盛 4	公卿達と源主明家* 流される途中の明家* 比叡山の衆徒が管轄* 比叡山に集る奥の明家* 比叡山に集る一行回廊型* 清盛邸で捕まる成親 成親の命乞をする重盛 法皇の御前に別れを告げる成親* 教盛と家臣(清盛に伝える季貞か) 清盛と武裝した兵士たちと公卿	公卿達と源主明家* 流される途中の明家* 比叡山の衆徒が管轄* 比叡山に集った明家* 九曜の形を見る一行回廊型* 清盛邸に密告する行綱* 清盛邸で捕まる成親 西光が清盛に言い返す* 引き控えられる成親 成親の命乞をする重盛* 法皇の御前に別れを告げる成親* 教盛から清盛への使者となる季貞 教盛の屋敷に戻る成親* 法皇に抗し武裝する清盛* 前庭に寝られる清盛	明家の罪を誅す公卿達 流される途中の明家 比叡山の衆徒が管轄 明家に奥を勤める坊友 明家の罪を誅す公卿達 西光が清盛に言い返す 成親の命乞をする重盛 季貞に使者を命じる教盛2 前庭に寝られる清盛

巻九 五段	林原重衡殿 絵巻	明暦二年 版本	瓦田宝物館蔵 絵本	明星大学蔵 絵本
小幡掛	桓武で新年を迎える平家一門	正月を迎えた仮御所か	正月を迎えた仮御所*	
宇治川	秋季に御所を与える高橋 生食を下賜される高橋 2 生食に気づく景季	生食を下賜される高橋 生食に気づく景季	生食を下賜される高橋 生食に気づく景季	生食を下賜される高橋 生食に気づく景季
河原合戦	景季に言いつくろう高橋 景季と高橋の宇治川の先陣争い 先陣の名乗りを上げる高橋 重親 2 敗走する木曾軍 2 戦後日取りに自を通す頼朝 出立に女と別れを惜しむ義仲 2 義仲軍と戦う東国勢 2	景季に言いつくろう高橋* 景季と高橋の宇治川の先陣争い* 景季と高橋の宇治川の先陣争い 出立に女と別れを惜しむ義仲* 義仲軍と戦う東国勢*	景季に言いつくろう高橋* 景季と高橋の宇治川の先陣争い* 出立に女と別れを惜しむ義仲* 義仲軍と戦う東国勢*	景季と高橋の宇治川の先陣争い 徒歩の先陣となる重親 出立に女と別れを惜しむ義仲
木曾退却	戦いつつ落ちてゆく義仲主従 2 今井兼平と再会する義仲 2 東国軍に追われる義仲勢 別れ際に頼朝の首を捻じ切る巴 2 義仲に自害を勧めた重平 2 泥田で討ち取られる義仲 2 壮絶な自害をする重平	御所に参上する義仲* 法皇と公卿たち* 東国軍と戦える義仲勢* 別れ際に頼朝の首を捻じ切る巴* 義仲に自害を勧めた重平* 壮絶な自害をする重平* 泥田で討ち取られる義仲*	御所に参上する義仲* 法皇と公卿たち* 東国軍と戦える義仲勢* 別れ際に頼朝の首を捻じ切る巴* 義仲に自害を勧めた重平* 泥田で討ち取られる義仲* 壮絶な自害をする重平*	御所に参上する義仲 法皇と公卿たち 東国軍と戦える義仲勢 別れ際に頼朝の首を捻じ切る巴 義仲に自害を勧めた重平 泥田で討ち取られる義仲 壮絶な自害をする重平
樋口合戦	義仲と重平の兵を闘う義光 2 名乗り争いで戦い付たれる光広 2 傷を負わされる樋口重光 3 引き回される義仲の首と重光 一の谷に布陣した平家軍	落伏した樋口重光* 引き回される義仲の首と重光*	落伏した樋口重光* 引き回される義仲の首と重光*	義光を集めて戦う重光 一の谷に布陣した平家軍
六筋度合戦	西国の兵隊を追い払う義仲勢 福良に攻め寄せた義仲勢 2 二騎になるまで戦って逃げる通信 5 忠兵衛に攻めかかる義仲勢 2 安原・西原の兵を討ち取る義仲 通信に頼朝氏勢を追い散らす義仲 深の御所に参上した頼朝と義仲 酒原の息目に伝承を誓む平家一門 祇園で祭りの沙汰をする宗隆 妻子を思い泣く重隆 2 西へ進軍する頼朝軍 2 小野原に布陣する義仲軍	二騎になるまで戦って逃げる通信* 安原・西原の兵を討ち取る義仲 通信に頼朝氏勢を追い散らす義仲 深の御所に参上した頼朝と義仲 酒原の息目に伝承を誓む平家一門 祇園で祭りの沙汰をする宗隆 妻子を思い泣く重隆 西へ進軍する頼朝軍と義仲軍 小野原に布陣する義仲軍	二騎になるまで戦って逃げる通信* 安原・西原の兵を討ち取る義仲 通信に頼朝氏勢を追い散らす義仲 深の御所に参上した頼朝と義仲 酒原の息目に伝承を誓む平家一門 祇園で祭りの沙汰をする宗隆 妻子を思い泣く重隆 西へ進軍する頼朝軍* 小野原に布陣する義仲軍*	二騎になるまで戦って逃げる通信 忠兵衛に攻めかかる義仲勢 西へ進軍する頼朝軍と義仲軍 小野原に布陣する義仲軍
三草勢揃	民家を焼き夜村に進む義仲軍 2 平家軍になだれ込む源氏軍 船で厚島へ渡る源氏たち 2 出陣を成遂げる義仲 2 船中に伝える義仲勢 2 老馬を案内に山道を行く義仲軍 2 頼朝に道案内を命じる義仲 平山寺の社子を開く熊谷直実 2	安原・西原の兵を討ち取る義仲 通信に頼朝氏勢を追い散らす義仲 深の御所に参上した頼朝と義仲 酒原の息目に伝承を誓む平家一門 祇園で祭りの沙汰をする宗隆 妻子を思い泣く重隆 西へ進軍する頼朝軍と義仲軍 小野原に布陣する義仲軍 民家を焼き夜村に進む義仲軍 平家軍になだれ込む源氏軍 船で厚島へ渡る源氏たち 出陣を成遂げる義仲 船中に伝える義仲勢 老馬を案内に山道を行く義仲軍 頼朝に道案内を命じる義仲 平山寺の社子を開く熊谷直実	安原・西原の兵を討ち取る義仲 通信に頼朝氏勢を追い散らす義仲 深の御所に参上した頼朝と義仲 酒原の息目に伝承を誓む平家一門 祇園で祭りの沙汰をする宗隆 妻子を思い泣く重隆 西へ進軍する頼朝軍* 小野原に布陣する義仲軍* 民家を焼き夜村に進む義仲軍 平家軍になだれ込む源氏軍 船で厚島へ渡る源氏たち 出陣を成遂げる義仲 船中に伝える義仲勢 老馬を案内に山道を行く義仲軍 頼朝に道案内を命じる義仲 平山寺の社子を開く熊谷直実	民家を焼き夜村に進む義仲軍 平家軍になだれ込む源氏軍 船で厚島へ渡る源氏たち 出陣を成遂げる義仲 船中に伝える義仲勢 老馬を案内に山道を行く義仲軍 頼朝に道案内を命じる義仲 平山寺の社子を開く熊谷直実
老馬	出陣を成遂げる義仲 2 船中に伝える義仲勢 2 老馬を案内に山道を行く義仲軍 2 頼朝に道案内を命じる義仲 平山寺の社子を開く熊谷直実 2	平家軍の陣* 船中に伝える義仲勢* 老馬を案内に山道を行く義仲軍 頼朝に道案内を命じる義仲*	船中に伝える義仲勢* 老馬を案内に山道を行く義仲軍 頼朝に道案内を命じる義仲*	老馬を案内に山道を行く義仲軍 頼朝に道案内を命じる義仲
一二之願	平家の木戸で熊谷に追いつく季重 新戦する熊谷父子と季重 徒歩で戦う熊谷父子 3 指馬で新戦する熊谷父子 平家の木戸で攻める源氏勢 船へ突入する河原兄弟 2 討死する河原兄弟 長男を押し再度突入する義仲 舟を背に戦う河原父子 2 入り組んで戦う重軍 船を落ちた鹿を射る平家軍 2 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 船で厚島へ向かう義仲たち 2 知盛に一の谷の敗戦を伝える 2 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 2 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 2 若武者の悲運に泣く直実 2 討ち死にする平家の武者達 2 父を助けて討死する知盛 2 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	新戦する熊谷父子と季重 徒歩で戦う熊谷父子 指馬で新戦する熊谷父子 平家の木戸で攻める源氏勢 船へ突入する河原兄弟 討死する河原兄弟 長男を押し再度突入する義仲 舟を背に戦う河原父子 入り組んで戦う重軍 船を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 知盛に一の谷の敗戦を伝える 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	新戦する熊谷父子と季重 徒歩で戦う熊谷父子 指馬で新戦する熊谷父子 平家の木戸で攻める源氏勢 船へ突入する河原兄弟 討死する河原兄弟 長男を押し再度突入する義仲 舟を背に戦う河原父子 入り組んで戦う重軍 船を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 知盛に一の谷の敗戦を伝える 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	平家の木戸で名乗る熊谷父子 平家の木戸で熊谷に追いつく季重 新戦する熊谷父子と季重 徒歩で戦う熊谷父子 指馬で新戦する熊谷父子 平家の木戸で攻める源氏勢 船へ突入する河原兄弟 討死する河原兄弟 長男を押し再度突入する義仲 舟を背に戦う河原父子 入り組んで戦う重軍 船を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 知盛に一の谷の敗戦を伝える 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒
二度之願	指馬で新戦する熊谷父子 平家の木戸で攻める源氏勢 船へ突入する河原兄弟 2 討死する河原兄弟 長男を押し再度突入する義仲 舟を背に戦う河原父子 2 入り組んで戦う重軍 船を落ちた鹿を射る平家軍 2 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 船で厚島へ向かう義仲たち 2 知盛に一の谷の敗戦を伝える 2 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 2 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 2 若武者の悲運に泣く直実 2 討ち死にする平家の武者達 2 父を助けて討死する知盛 2 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	指馬で新戦する熊谷父子 平家の木戸で攻める源氏勢 船へ突入する河原兄弟 討死する河原兄弟 長男を押し再度突入する義仲 舟を背に戦う河原父子 入り組んで戦う重軍 船を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 知盛に一の谷の敗戦を伝える 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	指馬で新戦する熊谷父子 平家の木戸で攻める源氏勢 船へ突入する河原兄弟 討死する河原兄弟 長男を押し再度突入する義仲 舟を背に戦う河原父子 入り組んで戦う重軍 船を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 知盛に一の谷の敗戦を伝える 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	指馬で新戦する熊谷父子 平家の木戸で熊谷に追いつく季重 新戦する熊谷父子と季重 徒歩で戦う熊谷父子 指馬で新戦する熊谷父子 平家の木戸で攻める源氏勢 船へ突入する河原兄弟 討死する河原兄弟 長男を押し再度突入する義仲 舟を背に戦う河原父子 入り組んで戦う重軍 船を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 知盛に一の谷の敗戦を伝える 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒
坂落	指馬を落ちた鹿を射る平家軍 2 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 船で厚島へ向かう義仲たち 2 知盛に一の谷の敗戦を伝える 2 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 2 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 2 若武者の悲運に泣く直実 2 討ち死にする平家の武者達 2 父を助けて討死する知盛 2 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	指馬を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 知盛に一の谷の敗戦を伝える 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	指馬を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 知盛に一の谷の敗戦を伝える 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	指馬を落ちた鹿を射る平家軍 馬を落としてみる義仲 炎上する陣と船へ逃れる平家軍 知盛に一の谷の敗戦を伝える 肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒
盛俊最期	肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 2 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 2 若武者の悲運に泣く直実 2 討ち死にする平家の武者達 2 父を助けて討死する知盛 2 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	肩籠を助け休息する盛俊* 盛俊の首を取る則恒* 船を切られ討たれる忠度* 忠度の残した敵を捕む六次太* 重衡を射られた重衡* 自害を止められた重衡* 若武者を呼び返す熊谷直実* 若武者の首を取る直実* 父を助けて討死する知盛* 船に逃げ延びた知盛と、井上黒*	肩籠を助け休息する盛俊* 盛俊の首を取る則恒* 船を切られ討たれる忠度* 忠度の残した敵を捕む六次太* 重衡を射られた重衡* 自害を止められた重衡* 若武者を呼び返す熊谷直実* 若武者の首を取る直実* 父を助けて討死する知盛* 船に逃げ延びた知盛と、井上黒*	肩籠を助け休息する盛俊 盛俊の首を取る則恒 船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒
忠度最期	船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 2 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 2 若武者の悲運に泣く直実 2 討ち死にする平家の武者達 2 父を助けて討死する知盛 2 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	船を切られ討たれる忠度* 忠度の残した敵を捕む六次太* 重衡を射られた重衡* 自害を止められた重衡* 若武者を呼び返す熊谷直実* 若武者の首を取る直実* 父を助けて討死する知盛* 船に逃げ延びた知盛と、井上黒*	船を切られ討たれる忠度* 忠度の残した敵を捕む六次太* 重衡を射られた重衡* 自害を止められた重衡* 若武者を呼び返す熊谷直実* 若武者の首を取る直実* 父を助けて討死する知盛* 船に逃げ延びた知盛と、井上黒*	船を切られ討たれる忠度 忠度の残した敵を捕む六次太 重衡を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒
重衡生葬	馬を射られた重衡 2 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 2 若武者の悲運に泣く直実 2 討ち死にする平家の武者達 2 父を助けて討死する知盛 2 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	馬を射られた重衡* 自害を止められた重衡* 若武者を呼び返す熊谷直実* 若武者の首を取る直実* 父を助けて討死する知盛* 船に逃げ延びた知盛と、井上黒*	馬を射られた重衡* 自害を止められた重衡* 若武者を呼び返す熊谷直実* 若武者の首を取る直実* 父を助けて討死する知盛* 船に逃げ延びた知盛と、井上黒*	馬を射られた重衡 自害を止められた重衡 若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒
敗徳最期	若武者を呼び返す熊谷直実 2 若武者の悲運に泣く直実 2 討ち死にする平家の武者達 2 父を助けて討死する知盛 2 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	若武者を呼び返す熊谷直実* 若武者の首を取る直実* 父を助けて討死する知盛* 船に逃げ延びた知盛と、井上黒*	若武者を呼び返す熊谷直実* 若武者の首を取る直実* 父を助けて討死する知盛* 船に逃げ延びた知盛と、井上黒*	若武者を呼び返す熊谷直実 若武者の首を取る直実 父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒
浜戦	父を助けて討死する知盛 2 船に逃げ延びた知盛と、井上黒	父を助けて討死する知盛* 船に逃げ延びた知盛と、井上黒*	父を助けて討死する知盛* 船に逃げ延びた知盛と、井上黒*	父を助けて討死する知盛 船に逃げ延びた知盛と、井上黒
承足	知盛の死を聞いて泣く宗隆たち 沈む船から引き上げられる師盛 源氏勢に討たれる通勢 2 海上をさすろう平家一門の船 通勢の死を聞き泣く小宰相 入水する小宰相 小宰相の死体を引き上げる平家 小宰相を水葬にする平家の人々 小宰相と通勢の原文の語 2	沈む船から引き上げられる師盛* 源氏勢に討たれる通勢* 通勢の死を聞き泣く小宰相* 入水する小宰相* 小宰相の死体を引き上げる平家* 小宰相を水葬にする平家*	沈む船から引き上げられる師盛* 源氏勢に討たれる通勢* 通勢の死を聞き泣く小宰相* 入水する小宰相* 小宰相の死体を引き上げる平家* 小宰相を水葬にする平家*	沈む船から引き上げられる師盛 源氏勢に討たれる通勢 通勢の死を聞き泣く小宰相 入水する小宰相 小宰相の死体を引き上げる平家 小宰相を水葬にする平家
舟渡	推盛の身を案じる北の方 都大路を渡される平家軍の首 推盛の病気を伝える斎藤兄弟 重衡を射く推盛の妻子 2 妻子の手紙に涙を流す推盛 都大路を引き回される重衡 重衡に病状を伝える定長 厚島への使者に伝言する重衡 申出て重衡の手紙を手する知時 2 重衡の手紙を揉む内裏女房 2 女房との対面の話しをうろ知時	引き回される牛車(内裏女房1か) 推盛の手紙を揉む妻子* 妻子の手紙を受取る推盛* 都大路を引き回される重衡 重衡に病状を伝える定長 厚島への使者に伝言する重衡 申出て重衡の手紙を手する知時 重衡の手紙を揉む内裏女房* 牛車と門外で待つ武士達*	引き回される牛車(内裏女房1か)* 推盛の手紙を揉む妻子* 妻子の手紙を受取る推盛* 都大路を引き回される重衡 重衡に病状を伝える定長 厚島への使者に伝言する重衡 申出て重衡の手紙を手する知時 重衡の手紙を揉む内裏女房* 牛車と門外で待つ武士達*	首を都大路を渡すよう求める源氏 首を都大路を渡すよう求める源氏 推盛の手紙を揉む妻子 推盛の手紙を受取る推盛 都大路を引き回される重衡 重衡に病状を伝える定長 厚島への使者に伝言する重衡 申出て重衡の手紙を手する知時 重衡の手紙を揉む内裏女房 牛車と門外で待つ武士達
舟渡	推盛の身を案じる北の方 都大路を渡される平家軍の首 推盛の病気を伝える斎藤兄弟 重衡を射く推盛の妻子 2 妻子の手紙に涙を流す推盛 都大路を引き回される重衡 重衡に病状を伝える定長 厚島への使者に伝言する重衡 申出て重衡の手紙を手する知時 2 重衡の手紙を揉む内裏女房 2 女房との対面の話しをうろ知時	引き回される牛車(内裏女房1か) 推盛の手紙を揉む妻子* 妻子の手紙を受取る推盛* 都大路を引き回される重衡 重衡に病状を伝える定長 厚島への使者に伝言する重衡 申出て重衡の手紙を手する知時 重衡の手紙を揉む内裏女房* 牛車と門外で待つ武士達*	引き回される牛車(内裏女房1か)* 推盛の手紙を揉む妻子* 妻子の手紙を受取る推盛* 都大路を引き回される重衡 重衡に病状を伝える定長 厚島への使者に伝言する重衡 申出て重衡の手紙を手する知時 重衡の手紙を揉む内裏女房* 牛車と門外で待つ武士達*	首を都大路を渡すよう求める源氏 首を都大路を渡すよう求める源氏 推盛の手紙を揉む妻子 推盛の手紙を受取る推盛 都大路を引き回される重衡 重衡に病状を伝える定長 厚島への使者に伝言する重衡 申出て重衡の手紙を手する知時 重衡の手紙を揉む内裏女房 牛車と門外で待つ武士達

第十一 巻段	林原真術御殿 絵巻	明暦二年版本	真田宝物館蔵 絵本	明皇大学蔵 絵本
	内侍所の唐紙を明けかける源氏軍	内侍所の唐紙を明けかける源氏*		
	引き上げられる宗盛父子 2		引き上げられる宗盛父子	
	乳母子の親類を見る宗盛			
	教経に追われ逃げて逃げる教経	教経に追われ逃げて逃げる教経*		
	実光兄弟を道連れに入水する教経	実光兄弟を道連れに入水の教経*	実光兄弟を道連れに入水する教経*	実光兄弟を道連れに入水する教経
内侍所入	平家軍と戦はる宗盛		平家軍と戦はる宗盛	
	平家の逃亡を妻上する広綱	割替する三人(桂屋出家②)*		
	原に護送される平家の男女 2	修行者と侍連(桂屋出家④)*		
	袈裟を連ねて鳥羽に向かう人々	僧道と通行人(熊野参詣①)*		
		社殿を拝む修行者連(熊野参詣①)	都に戻された袈裟*	
二門大路控渡	二宮寛政の牛車を見送る女院			
	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち	都大路を引き回される宗盛たち
	選る清宗に着物を掛ける宗盛			
平大納言文之沙汰	文箱の処遇を時忠に相談する時忠	文箱の処遇を時忠に尋ねる時忠*		
	文箱を時忠の娘に返す教経 2	文箱を時忠の娘に返す教経*		文箱を時忠の娘に返す教経
	教経の所業に激怒する頼朝			
副将被斬	副将を抱いて泣く宗盛	副将を抱いて泣く宗盛*	副将を抱いて泣く宗盛	副将を抱いて泣く宗盛
	副将を見送る宗盛父子			
	副将に斬りかかる兵士連 2	副将の首を斬る兵士連*	副将の首を斬る兵士連*	副将の首を斬る兵士連
	副将の首を斬る兵士連 2			
	副将の首を抱いて入水した女房連			
鎌越	鎌倉へ護送される宗盛父子と教経	頼朝に謁言する宗盛*		鎌倉へ護送される宗盛父子と教経
	頼朝に出言する宗盛と集まる兵士			
	申洗滞の間に道連れされる教経			
	申し開きの状を書かせる教経	申し開きの状を書かせる教経*	申し開きの状を書かせる教経*	
大僧院誅罰	頼朝の口上を奥まわって承る宗盛	頼朝の口上を奥まわって承る宗盛*	頼朝との対面を持つ宗盛父子	頼朝の口上を奥まわって承る宗盛
	原に護送される宗盛父子	宗盛に引取を渡す僧*		
	首を討たれる宗盛	首を討たれる宗盛*	首を討たれる宗盛父子*	
	父の墓標を尋ねる清宗			
	活された宗盛父子の首			
第十二 巻段	林原真術御殿 絵巻	明暦二年 版本	真田宝物館蔵 絵本	明皇大学蔵 絵本(第十二巻)
重衡被斬	北の方と対面する重衡	奈良へ送られる重衡*	奈良へ送られる重衡*	北の方と対面する重衡*
	駈を形見に北の方に渡す重衡			
	北の方と別れる重衡			
	奈良の大塚に引渡される重衡 2			
	斬首される重衡	斬首される重衡*	斬首される重衡*	
大地敷	泣き悲しむ尼僧連(長谷六代④か)			
	大地敷に逃げまどう人々	大地敷に逃げまどう人々*		
	御所へ返却する法皇の一行 4	御所へ返却する法皇の一行*	御所へ返却する法皇の一行	
描掃沙汰	頼朝の袈裟を掛け替える頼朝	頼朝の袈裟を掛け替える頼朝		
	頼朝の袈裟を掛け替える頼朝 2			
平大納言被流	頼朝の真に筋首を掛ける宗盛	妻子と名姪を惜しむ時忠	妻子と名姪を惜しむ時忠	妻子と名姪を惜しむ時忠
	東山門院に別れを告げる時忠			
	妻子と名姪を惜しむ時忠			
	原所へ護送される時忠			
土佐房被斬	教経に頼朝を斬る頼朝	教経に頼朝文を斬く土佐房*		
	教経にお話文を書く土佐房 2			
	教経の要領をかける土佐房 2			
	土佐房勢を討破る教経主従	土佐房勢を討破る教経主従*		
	教経の前に引出された土佐房 2		教経の前に引出された土佐房*	
判官被流	頼朝に教経追討を命じる頼朝			
	援方三郎に助勢を頼む教経 2	教経勢に攻めかかる太田勢*	九州に下向する教経勢	
	九州に下向する教経勢 3	九州に下向する教経勢*		
	教経勢に攻めかかる太田勢 2			
	教経に置き去りにされた女房連 1			
	教経追討の院首を頼む北条時政			
吉田大納言沙汰	頼朝の申請を檢討する法皇たち			
六代	次々に捕えられる平家の子孫連 2	六代の恐れ家を見つけた時政勢*	六代の恐れ家を見つけた時政勢*	六代の恐れ家を見つけた時政勢*
	六代の恐れ家を見つけた時政勢 2			
	壇坊の六代を取り囲む時政たち			
	六代を運行する時政の一行 2	六代を運行する時政の一行*	六代を運行する時政の一行	
	六代に返事を置く母妻			
	文書に六代の助命を頼む乳母	渡打標の僧たち(六代被斬②)*	文書に六代の助命を頼む乳母*	
	泣く親子連(長谷六代③の鐘間か)	護送の奥(六代被斬③か)*		
	時政に六代の命をいする文書 2			
	六代の身を案じる母君たち	東海道を下る奥*	六代の身を案じる母君たち*	
	斬首の場に引き出される六代 2	斬首の場に引き出される六代*	斬首を止める使者の僧*	
	斬首を止める使者の僧 2			
	頼朝の罪状を頼む時政			
長谷六代	母君を頼む文書 2			
	大覚寺にたどり着いた六代			
	泣く女房連(六代幼少の鐘間か)			
	命を奪う尼(重衡被斬⑥の鐘間か)			
六代被斬	命を奪う泣く六代(六代被斬②か)			
	原に出る六代②(六代被斬①か)			
	聞かれた文書	山を下る六代の奥(長谷六代①)*	鎌倉へ送られる六代*	
		六代と再会する母(長谷六代②)*		
女院御出家	首を斬られる六代			
	東山の僧坊で泣く桂門院			
	泣く僧と公臣連(小原被斬④か)	出家する女院*	出家する女院*	
	選る尼衆の桂門院	命を奪う二人の尼*		
	依田の院をたためる女院			
	女院を頼りに訪れる女性たち			
小原入形	小原の里に移る女院 2			念仏を唱える女院たち*
	物君に人の助けを思う女院			
小原被幸	小原に被幸する法皇	小原に被幸する法皇*		
	程光院の扉を叩く法皇 2			
	法皇と語り合う阿波の内侍			
	女院を待つ法皇(小原被幸④か)	女院を待つ法皇*	法皇と語り合う阿波の内侍*	女院を待つ法皇
六道之沙汰	女院と語る法皇(六道之沙汰①か)	女院と語る法皇	女院と語る法皇*	
女院御往生	法皇を送る女院 2	三人の尼*		
	頼朝を迎える女院	頼朝の女院と阿弥陀の来迎*	頼朝の女院と阿弥陀の来迎*	